

会則の改正

現 行	改 正
<p>(役員の任期)</p> <p>第9条 役員の任期は、次のとおりとする。</p> <p>(1) 会長、副会長及び監事 4年</p> <p>(2) 理事 2年</p> <p>(3) 支部長 その支部で定めた年数</p> <p>2 役員は、再任されることができる。</p> <p>(総会の開催及び運営)</p> <p>第13条 総会は、4年に1回以上開催する。</p> <p>2 総会は、会長が招集する。</p> <p>3 会長は、役員会の構成員の3分の2以上の者から開催の請求があったときは、総会を招集しなければならない。</p> <p>4 総会の議長は、その総会において出席した普通会员のうちから選出する。</p> <p>5 総会の議決は、この会則に定めるもののほか、総会に出席した普通会员及び学生会員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。</p>	<p>(役員の任期)</p> <p>第9条 役員の任期は、次のとおりとする。</p> <p>(1) 会長、副会長及び監事 2年</p> <p>(2) 理事 2年</p> <p>(3) 支部長 その支部で定めた年数</p> <p>2 役員は、再任されることができる。</p> <p>(総会の開催及び運営)</p> <p>第13条 総会は、2年に1回以上開催する。</p> <p>2 総会は、会長が招集する。</p> <p>3 会長は、役員会の構成員の3分の2以上の者から開催の請求があったときは、総会を招集しなければならない。</p> <p>4 総会の議長は、その総会において出席した普通会员のうちから選出する。</p> <p>5 総会の議決は、この会則に定めるもののほか、総会に出席した普通会员及び学生会員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。</p>

静岡大学文理・人文学部同窓会 新役員 (全員再任)

会 長	鈴木 基之 (文理 14 経)	静岡支部)
副会長	小林 五郎 (文理 09 経)	静岡支部)
副会長	辻 昭 (文理 02 経)	静岡支部)
副会長	寺尾 理 (文理 11 地学)	静岡支部)
副会長	山口 茂 (人文 01 外史)	静岡支部)
副会長	三島 文夫 (人文 03 法)	静岡支部)
副会長	落合 康彦 (人文 13 法)	静岡支部)
監 事	大橋 昭夫 (人文 02 法)	静岡支部)
監 事	小川 利春 (人文 05 法)	東京支部)
監 事	早川 登上 (人文 09 法)	東海支部)

“会長、副会長の任期を2年に”同窓会活動の活性化を!! 「平成17年文理・人文学部同窓会定例総会」

副会長 三島文夫



11月12日(土)、午後1時から、四十数名の出席の下、同窓会総会が静岡市駿河区馬淵1丁目の「あざれあ」で開かれた。鈴木基之会長から活動報告があり、続いて石神政一(文理8回卒)が議長に選出され、議案の審議に入った。

第1号議案は、同窓会会則の改正で、第9条の会長、副会長及び監事の任期を「4年」から「2年」に変更し、それに伴い、第13条の総会の開催を「4年に1回以上」から「2年に1回以上」にするもので、執行部から、同窓会活動の活性化を図るために改正したいとの説明があった。これに対し、愛野明宣前会長から、「会長の任期4年は、長い。会長の職務もなかなかたいへんである。また、同窓会の活動に新しい力を導入するためにも、2年が適当である。」との賛成意見が述べられ、出席者全員の賛成により、承認された。

第2号議案は、役員を選出で、新たな立候補、推薦もなく、前の会長、副会長、監事が再選された。再選に当たり、鈴木基之会長は、これまで以上に、同窓会活動の活性化、財政基盤の強化、事務局体制の充実に取り組んでいくとの抱負を述べられた。

総会に続いて、法科大学院教授伊藤博史さん(人文4回卒)が、「静岡大学法科大学院の現状」と題して講演をされた。その中で、「17年度の入学者の中で最高齢者は、名古屋大学理学部の出身で、高校で物理を33年間教えてこられた。高校教師の経験を活か

して少年事件の専門家になりたいとの希望をもって勉強に励んでおられる。法学部における4年間の法学教育は、重い。新司法試験合格を3000m級の高山への登山に例えるなら、法学部出身者は、すでに1200m~1300mくらい登っているといてもよいかもしれない。他学部の出身者は、大変である。法科大学院生の置かれている状況は、厳しい。私も、学生の力になれるよう一生懸命頑張っている。」と熱く語られた。

その後、懇親会に移り、松田純人文学部長は、祝辞の中で「大学と同窓会の一層の連携、活性化の必要」を語られた。また、大江泰一郎法科大学院長は、「先日、新潟大学法科大学院の先生が訪問に見えて、法廷教室を見て、びっくりしておられた。同窓会に感謝している。来年度の入学者の募集を10月28日に締め切ったが、229名もの多数の応募者があった。われわれ教官も期待に応えられるよう、頑張っていきたい。」と述べられた。在学生4人の出席もあり、有意義な懇親会であった。



個人情報保護に関する要綱

静岡大学文理・人文学部同窓会は、会員相互の親睦と向上を図り、併せて母校との関係を親密にすることを目的として結成されている団体であるが、その活動の基盤として、住所、氏名、卒業年次、卒業学科等を記載した同窓会名簿を保有し、個人情報の保護に関する法律(平成15年法律第57号)に定める個人情報取扱事業者に該当する。

そこで、同窓会名簿を適正に管理していくために、法律に定められた事項その他必要な事項をこの要綱にまとめた。今後は、この要綱に従って、同窓会名簿を管理していくこととする。

静岡大学文理・人文学部同窓会名簿に係る個人情報の保護に関する要綱

(平成17年10月8日役員会決定)

(目的)

第1 この要綱は、同窓会が保有する同窓会員に関する個人情報の適正な取扱いについて、基本的な事項を定める。

(定義)

第2 この要綱において「個人情報」とは、同窓会員個人に関する情報であって、同窓会名簿に記載されている氏名、住所、自宅の電話番号、職業、勤務先名、卒業年次、卒業学科、専攻ゼミナール、出身高校、在籍した寮をいう。

(利用目的の特定)

第3 個人情報は、同窓会及び同窓会員が会員相互の親睦と向上を図るための活動や静岡大学との関係を親密にする活動に利用するものとする。(法第15条)

(利用目的による制限)

第4 同窓会及び同窓会員は、あらかじめ本人の同意を得ないで、第3の規定により特定された利用目的の範囲を超えて、個人情報を取り扱ってはならない。(法第16条)

(データ内容の正確性の確保)

第5 同窓会は、利用目的の達成に必要な範囲内において、個人データを正確かつ最新の内容に保つよう努めなければならない。(法第19条)

(安全管理措置)

第6 同窓会は、その取り扱う個人データの漏えい、滅失又はき損の防止その他の個人データの安全管理のために必要かつ適切な措置を講じなければならない。(法第20条)

(従事者の監督)

第7 同窓会は、その従業者に個人データを取り扱わせるに当たっては、個人データの安全管理が図られるよう、従業者に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。(法第21条)

(委託先の監督)

第8 同窓会は、個人データの取扱いの全部又は一部を委託する場合は、その取扱いを委託された個人データの安全管理が図られるよう、委託を受けた者に対する必要かつ適切な監督を行わなければならない。(法第22条)

(第三者提供の制限)

第9 同窓会は、あらかじめ本人の同意を得ないで、個人データを第三者に提供してはならない。(法第23条)

(開示)

第10 同窓会は、本人から、保有個人データの開示を求められたときは、遅滞なく開示しなければならない。(法第25条)

(訂正等)

第11 同窓会は、本人から、保有個人データの内容が事実でないという理由によって、訂正、追加又は削除を求められた場合には、遅滞なく必要な調査を行い、訂正、追加又は削除を行わなければならない。(法26条)

(利用停止等)

第12 同窓会は、本人から、保有個人データがあらかじめ本人の同意を得ないで利用目的の達成に必要な範囲を超えて取り扱われているという理由又は偽りその他不正の手段により取得されたものであるという理由によって、当該保有個人データの利用の停止又は消去を求められた場合であって、その求めに理由があるときは、遅滞なく利用の停止又は消去を行わなければならない。(法第27条)

(苦情の処理)

第13 同窓会は、個人情報の取扱いに関する苦情の適切かつ迅速な処理に努めなければならない。(法第31条)

○ 現在の同窓会名簿は、従来の旧版を加筆、訂正し、平成16年3月に作成したものであり、本来ならば、この時に、個々の会員の皆様方に、登載情報について、御了解を得ておくことが適切であったと思いますが、この度、個人情報の取扱いの適正を期すための「個人情報の保護に関する法律」が平成17年4月1日から施行され、今後は、従来以上の厳格な対応が必要になります。

同窓会の大きな事業の一つとして同窓会員名簿の発行があり、今後とも同窓会活動の基盤情報として同窓会名簿を活用していくことと併せて法に則った適正な情報管理をしていきたいと考えておりますので会員各位の御理解と御協力をお願いします。

なお、どうしても「同窓会名簿への登載は困る」という方は、今後の改訂版からは、削除したいと考えておりますので、御遠慮無く同窓会事務局まで申し出てください。

4年間を振り返って・・・そして新たな2年

同窓会長 鈴木基之

愛野前会長からバトンを受けて4代目会長に任命されましたのが、4年前のことです。4年前は21世紀になった年で、私達を取り巻く社会情勢は今とは大きく異なっておりました。小泉内閣が誕生した年です。

同窓会活動もこの4年間は、会員の相互親睦よりむしろ母校の発展にエネルギーを割いた感があり、会員のみなさまにはかえってご迷惑をかけたかとお詫びしなければなりません。

全学同窓会設立

当時、大学改革が叫ばれていましたが、昨年4月とうとう国立大学が法人化されました。我が母校も「国立大学法人 静岡大学」として、新たなスタートを切りました。

国立大学のそれまでは、財政面で国家丸抱えといっても過言ではなかったでしょう。それが、大学の自主性の名の下に「自主財源獲得・運営」の努力を強いられることになった訳であります。静大当局も生き残りをかけ学内改革に取り組みました。「研究」・「教育」を充実させるために努力を重ね「地域社会」「経済界」へも協力を仰いできました。卒業生にも物心両面での応援依頼があり、力強い味方として期待がかけられました。大学も生き残りをかけた本格的な競争の時代となったので、私ども同窓会も危機感を持ちました。後ろを振り返ったら母校がなかったということになりかねません。

(静岡大学は旧制静高、師範学校、浜松工業専門学校を統合し新制静岡大学として発足、静岡農学校を合わせ、さらに学部改組で人文学部・理学部を、その後新たに情報学部をつくり現在に至っていることは、ご承知のとおりであります。)

その学校の生い立ちから、各同窓会も独立して活動していましたので静大卒業生の組織が丸一となって応援する訳にはいきませんでした。幸い、わが同窓会の愛野前会長が、静大設立50周年を契機に立ち上げた静大の5つの同窓会で構成する「同窓会連絡会」がありました。これを母体に「静岡大学全学同窓会」を設立(2004年4月13日)しました。目的は「静大同窓生ならびに関係者が相互交流を図ることと母校の発展」であります。会員数は約10万人。会長は浜松工業会の畫馬

同窓会副会長 鈴木基之

も多数参加していただき交流を深めました。

会員名簿の発行

4年に1度の会員名簿の発行をいたしました。この資料集めや発行校正等、名簿委員のみなさまはもちろん各支部に協力いただき、大変ありがとうございました。名簿は同窓会活動の基礎になるものであります。データの正確さが、命であります。会報のお届けはもちろん各種の連絡ができません。会員のみなさまには、住所変更等内容変更の時には、本部あてご一報ください。本年4月から「個人情報保護法」が施行されました。この対応が遅いというご批判もあり、役員会で協議しまして「取り扱い要綱」を定めました。当同窓会もそのデータについては厳格に取り扱っております。会員のみなさまも、そのデータ内容については同窓会活動以外にはお使いにならずに、慎重に厳格に取り扱われる様くれぐれもご注意下さい。

小集団活動支援

同窓会活動のオフィシャルな組織としまして支部組織があります。支部総会を1年または2年に1回開いて会員相互の親睦交流を図っていますが、同窓生の交流親睦はこれ以外のものが多いようです。同期会・ゼミ会・恩師を囲む会・サークル・寮・職場・法曹、教員等の同業仲間の会など数えあげればキリがありません。会員相互の親睦交流とはこれらがベースだと考えています。この会を催すには連絡通信費も大きな負担となります。この集まりに補助をしているのが、「小集団活動支援」でこの4年間で50件を超す利用があり、年々増えています。喜ばしいことだと思っています。

学生会員への支援

学生会員には「全学同窓会」以外にも当同窓会独自の支援を行ってまいりました。学生会員には入学時に「終身会費」2万円を納入していただいていること、また同窓会員として卒業後に社会へ出て十分な活躍をしてもらうために、少しでも役立てられるように会員が講師となって「先輩に聞く、仕事と人生」の講演会を開催してまいりました。

「静岡大学学生新聞」縮刷版(CD)発行協力

新聞会OB・OGによる「元気会」の要請で、過去39年間にわたる249号の「静岡大学学生新聞」縮刷版の発行にも欠番探しをする等協力いたしました。

会員相互交流事業開始

卒業生の中の弁護士・会計士・税理士等『士』のつく30名ほどの専門家に登録していただき卒業生の相談にのってもらう「会員相互交流事業」も開始いたしました。これはまだ利用者がほとんどないようです。これからの課題です。

新支部設立計画

支部は現在6支部(北海道、東京、静岡、浜松、東海、関西)ありますが、距離的に遠く離れていて支部活動に参加できない会員もあります。その空白を埋めるべく支部の設立を企図しています。核となる方がいればとあたってるところです。

4年間の主な活動は以上です。

11月12日の総会で会長を拝命しました。同時に現職の副会長・監事のみなさまも再任されました。新役員とともに同窓会活動の活性化に全力投球してまいりますので、会員のみなさまにも引き続きご理解ご支援をお願い申し上げます。

会則の変更により、役員任期が2年となりました。2年に1回の総会ですから、活動も密にしなければなりません。初心にかえて、同窓会の目的を改めて思い起こします。「会員相互の親睦と向上を図り、併せて母校との関係を親密にすることを目的とする。」過去4年間、母校の発展に軸足がかかっていました。大学間競争が激化している現在、これも継続してまいります。目的の前段についても更なるエネルギーを注いでまいりたい。

同窓生の絆の強化

「同じ学び舎で学んだ者同士が、お互いに助け合い親睦を深める。」ITが普及したとはいえ、会員がお互いに顔を会わせ、共同で何かをする。これが基本だと思っています。そのためには、集まる機会を多くすることです。

(小集団活動)

全国いたる所で、同窓生の集会が行われる

ことに本部で支援をしていきます。今まで以上に予算化をして小集団の活動が活発化することを期待します。その趣旨から前渡し金制度も活用して欲しい。

(支部活性化)

最近は2年に1回の支部総会開催が一般化しつつあります。支部役員の方々のご苦勞は充分承知ですが、支部総会や懇親会等催事を多く行っていける環境づくりも図りますので会員各位のご参加をお願いします。

(新支部の設立)

現在、浜松工業会には30支部があります。それだけ活動が活発で多くの会員が同窓会に結集し参加しやすいことになっているものと思われます。我が同窓会も約17千人(学生会員含む)の会員を擁しながら6支部です。少しでも活動に参加しやすくするため支部を増やしたい。

北陸地区(石川・富山・福井3県)で400名近くの会員がいますが、地域的に支部活動に参加しにくくなっています。この地域を手始めに西日本(九州・中国・四国地域)にも支部ができればと考え、準備していきます。

また、同窓会員の中で重要な位置(将来の同窓会の中核となる)を占めている学生会員に対しても、「学生会員支援」を通じながら「学生支部」設立も検討課題と考えています。

他同窓会との関連

(全学同窓会)

国立大学法人化にともう母校応援団としての誕生で、「母校発展」活動が主体ですが、「オール静大」の観点から卒業生同士の交流も図っていきたい。今も役員間、サークル会合、同職場仲間等では若干交流がありますが、これからは同地域支部間の交歓などは如何でしょうか。各同窓会の情報を収集し支部に提供して、その環境をつくっていこうと考えています。浜松工業会主催の沖縄地区の会合には、招かれて文理・人文同窓会会員も参加することもあるようです。各同窓会支部からの遠隔地での「集会」には静大各同窓会の共催あるいは「全学同窓会」主催も考えられます。

(旧制静岡高等学校同窓会)

旧制静高は2年後創立85周年を迎えます。旧制静高同窓会は「85周年記念大会」開催に向けて準備活動中です。大会後の活動については現役員の方々が検討中とのことです。とくに文理・人文同窓会の東京支部は事務所を間借りしてその活動のお手伝いをしています。「記念大会」には「80周年大会」と同様に大いに協力していきます。その後については旧制静高同窓会の活動方針が決まった後、良好な関係を維持しつつ対応していく予定です。

母校との関連

法人化となって2年目、法科大学院誕生の初年度、大学の基礎固めの時期です。ここ数年間が大学発展のチャンス、存続の分かれ目だと認識しています。これまでと同様に物心両面で応援していきます。法科大学院に関しては、3年後に最初の卒業生が生まれ、社会での活躍が期待されますので、「支援協会」に結集してその充実に協力していきます。会員のみなさまには絶大なご支援を重ねてお願いします。

財政基盤の検討

同窓会活動の基盤は、会員の熱意・行動とともに財政安定にあります。現在の財政の基礎は会員の終身会費(1人2万円)です。新入会員(新入生)の納入にほとんど全てを頼っています。近年はその納入率も下がり気味で、単年度の通常支出も賄えず基金を取り崩してバランスを取っているのが現状です。今後、新入生の納入率を上げること、既存会員の未納者の納入をすすめることです。未納の方々には是非ご協力をお願いします。そのためには、同窓会が魅力のあるものとならなければなりません。他同窓会では、終身会費制から年会費・寄付金制に変更したところもあります。財政については、この2年間で見直し検討課題となります。

以上これから2年間まだまだやるべきことが、山積しております。役員一同、新たな気持ちで今までの活動をさらに充実・発展させるよう取り組んでまいります。会員のみなさまのお力添えを得て「同窓会」の発展に尽くしたいと存じますので、よろしく願い申し上げます。

「先輩に聞く、仕事と人生」開催

副会長 小林五郎

さる11月17日、母校静大キャンパスで先輩の3氏を呼んでセミナーを開催した。昨年に続く2回目の企画で、同窓会が学生会員に対して行っている大事な事業の一つです。学生は今まで20年近く学業一筋で生活してきていて実社会の事が分からない。自分たちがかつてそうであったように、就職するのに多くの不安を抱えている。30年、40年の年月の中で、喜びや失敗を重ねて学んだ事を少しでも後輩に話をして役立てて欲しいという思いがあり、出来るだけたくさんの学生諸君に聞いて欲しいと、そんな強い思いで開催しました。

時間の都合で一人30分という限られた時間の中で、40年近い人生体験を語りつくすことは到底出来ない事ですが、要点を絞り込んで分かり易く話され、とても素晴らしいセミナーになりました。ただ残念なことは翌日から始まる大学祭の準備に追われて参加者が予定よりはるかに少なかったことです。来年以後の反省としたい。



藤木紀男氏

文理12回卒、法学専攻。昭和39年静岡県庁に入り、最終職位は出納長、現在は県信用保証協会会長。

『つまらないと思える仕事でも無駄な仕事は一つもない』

役所は法律に基づいて仕事をすることで、多面的な活動が求められています。私は11部局あるなかで7部局を経験しました。大半は中小企業対策関係でした。県以外の市町村、公共経営の大学院、自治体国際化協会などへ出向することもあります。

県の仕事は大別して次のようになります。防災対策、福祉と健康、環境対策、経済産業、道路河川、教育文化、治安対策などです。これらの仕事に一般行政職6200人、教育26000人、警察6500人、病院2000人が従事しています。

身近な例ですが、大卒の新入職員が辞令を交付されたとき発した言葉は「そこは希望していないので辞めたい」でした。思い直すよう話し合いましたが、結局辞めていきました。言えることは希望のセクションに必ずつけるとは限らないという事です。

予算が削られ、仕事量も増え、心身症で休暇している職員もいてとても厳しい環境ですが、自分とたたかって打ち勝つしかないし、身の回りに相談できる相手を見つけておくことが大事です。

現在、三位一体改革が進められています。これからは自治体の役割が一層重要になってくると思います。公務員の倫理観をしっかりと持っていることが大切です。自分の仕事を常に客観的に見て、誰のために仕事をしているのか時々自問してみることが大切です。

中には、つまらないと思われる仕事もありますが、目的としているところは同じで決して無駄な仕事はないのです。これは本人の意識の問題で、つまらないと思った仕事も意義になり、このことが仕事にやりがいを見出せるようになるのです。



植松高豊氏

文理9回卒、経済。昭和36年トヨタ自動車入社。56年光洋精工再建のため出向、63年転籍、平成9年同社副社長、13年退任。現在は光洋サーモシステム(株)代表取締役会長。

『社会のリーダーになる志を持ってください』

高校時代は野球部にいたので体力には自信があった。負けることが多かったが、この中で負けてもくじけない精神を培った。何事も勝ちと負けはあるが、負けてもくじけない事が大事。仕事がハードの時、失敗したとき、高校時代の経験が役立った。

静大では寮生活をし、全国から集まった多くの仲間と夜を徹して語り合い、かつ恋多き青春時代を過ごした。若いときにいろいろな事を経験しておく事はとても大事な事です。

トヨタに入ったときは、会社の事は何も分らず、配属先の原価管理では先輩に叱られてばかりいた。時間とともに原価管理とは企業経理の中枢であることが判ってきて、次第に仕事が面白くなってきた。

自動車部品は当時で15000点、今では30000点あり、あらゆる素材を使用しているまさに総合産業です。入社当時、アメリカのGMといえば夢のまた夢の存在だった。このことを象徴する出来事として当時の一万田総裁は、トヨタが自動車を作るといったとき「アメリカに勝てるわけないからそんな無茶はやめとけ」といわれました。でもトヨタはアメリカに追いつき追い越せをスローガンに自動車造りをスタートさせたのです。

昭和30年代、当時の通産省は自動車産業を国家戦略と位置づけ育成に乗り出していた。丁度東京支社勤務の頃で、欧米の技術を学びたくても参考文献が何もなく、通産省の後押しもあり3年がかりで“欧米自動車部品工業総論”を二人でまとめました。これは今でも自動車部品のバイブルとして使われており、日本の自動車産業発展の礎になったと思います。

本社に戻り購買部に所属して、物を仕入れることの基本を身に付けて行きます。同時に管理職としての役割も仕事を通して学びました。

昭和56年、オイルショックで経営の行き詰った光洋精工へ、経営建て直しのために出向を命じられます。過剰設備、過剰人員、在庫、資金の借入れ過多、資金作り、事業の多角化、企業風土の悪化など多くの問題を抱えており、企業の経営リーダーとして判断し改善してゆることが求められました。再建プランをたてこれを確実に実行したのです。

ベアリングは産業の米といわれ、国家戦略の中心に位置づけられていて、この競争に負けたら国も負けるとまで言われています。戦後日本で最初に輸出して稼いだのはベアリングであり、光洋精工は何としてでも再建しなければならない。強い使命感で始めましたが、人の心まで変えて再建するまでには実に15年の歳月を要しました。かくして今日では売り上げで当時の7倍を超え完全に利益の出せる体質に変わったのです。来年光洋精工は豊田工機と合併しJ-TECTとしてスタートします。売り上げ規模は再建当時の10倍の一兆円企業に変身、ベアリング、ステアリングでは世界有数の企業になります。

最後に後輩のみなさんへ伝えておきたい。

- 1、あらゆるものは常に変化し続けること。
 - 2、チャンス(情報)は四方八方から来て、通り過ぎてゆく。何を選択するかが問われること。
 - 3、選択する根拠は何か。考え方、基準、原理原則。一步前進する勇氣はあるか。
 - 4、失敗したり、知らないことがあった時どう行動するか。隠さずオープンできるか。学ぶ姿勢があるか、努力するか、再発防止の工夫をするか。
 - 5、すべての物事の中には人がいる。人が好きになれるか、よりよいコミュニケーションをつくれるか、他から素直に学べるか。
- 皆さんは是非社会のリーダーになる志を持ってください。その可能性は99パーセントあります。それは能力差ではなく継続した努力差にこそあるからです。



三島利徳氏

人文2回卒、外国史学、昭和45年信濃毎日新聞社入社、地方の支局を経て論説委員、社説執筆を経て、コラム「斜面」執筆中。

『若者よ! マスコミを目指して欲しい!』

- まず始めに申し上げたいのは
- 1 マスコミを目指して欲しい。
 - 2 自己アピールをしてください。
 - 3 忍耐して自分の得意分野を造ってください。

コラム斜面は、長野県は山が多く斜面がいたるところにあるので「斜面」にしました。その斜面を今年の1月より担当しています。毎日書くので大変ですが、週に6日書くので自嘲気味に自分の名前は「週六」と名乗り宣

伝えています。5日なら「週五」4日なら「週四」。

コラムは硬すぎず、しかも落ちをつけるので結構大変です。

入社するにはそれなりの準備が必要です。私は入社するために猛勉強しました。それに入社したい動機を明確に持ち、面接の時表明する事が大切です。

配属されてからは、警察担当、市町村担当、一人勤務の地方支局の経験をしました。支局にいたとき、単なる出来事の報告では面白くないので地域に入り込んで特集記事として本社に送りました。これが本社で注目され、本社に呼び戻され文化部長とデスクとして17年間勤めました。紙面づくりでは多くの有名人、専門家と親しくなり、原稿を依頼します。いろいろと苦勞もあり、例えば戦前公然と戦争反対が言えなかったときに「生活雑記」としてさりげなく戦争の悲惨さを書くとか、嫁しゅうとのいさかいを「私の声」として取り上げたり、日ごろ言えない本音を、あまり相手を傷つけないよう工夫して載せたりしていますが、こうした事は新聞が担うべき大切なことだと思います。

最近若者は新聞を読まなくなってきています。ある調査によると若者の情報源は、1 テレビ、2 インターネット、3 新聞です。インターネットの著しい普及で新聞の将来が危ぶまれています。ネットでは例えば自殺サイトで呼びかけて自殺者が出るなど社会問題も出てきています。新聞は批判精神で社会に警告することも出来るわけで、ネットに出来ない事で社会の信頼性を高めていければと思います。

最後にマスコミの役割について申し上げて終りにします。先輩から受け継いで私の座右の銘としている言葉です。鳴き通すことで世に伝えられることがあります。

「コロロギは 鳴き通したり 嵐の夜」

集い

静大文理 S27 入学同期会レポート

文理4経 和田八束

文理学部に昭和27年(1952年)入学した私たちは、かなり多様な専攻のものが一緒になっており、卒業後のコースもまちまちであった。文理学部であるから文系と理系に分かれていたが、文系には文学のほか法政、経済があり、理系には工学部進学と医学部進学のコースもあった。また他大学に転学するケースもあった。新制大学の初期の混乱期に学生生活を送ったわれわれであったが、当時の静大と友人関係を懐かしむ気持ちはむしろ大きなものがある。今までに5年ごと、最近では3年ごとに同期会を開いてきた。

今回は秋の伊豆長岡温泉に40人の同期生が集い、すでに70を過ぎても元気な仲間が旧交を温めた。お元氣な田辺郁子さんも同席し、50年も以前の学生時代の思い出話が尽

きることがなかった。翌日は長岡近傍の史跡見学として、蛭が小島・歴史民俗資料館、葦山反射炉、願成就院、本立寺などをバスでめぐるツアーを行った。

同期の中には物故者もあり、体調や仕事の都合などで参加できなかった友人もいたが、なお元氣で活躍している者も多く、また次回の邂逅を期して別れた。私たちの仲間は終戦を少年時代に迎え、旧制中学から新制大学へと戦後の学制改革に揉まれ、社会に出てからも幾多の経済変動や社会変化を体験しながら生きて来た、いわば歴史の証人である。今後ともその体験からの証言者として生き続けたいというのが、同期会参加者の共通した願いであったと思うのである。(2005年11月21日)



静岡大学文理学部第3回卒業生 卒業50周年記念懇親会 開催

文理3法 吉川紀一

昭和30年春、大岩の学び舎から不景気風が吹き荒れる社会へ巣立ってから半世紀の時流れ、古希がとうに過ぎたクラスメートが久しぶりに一同に会しました。

本年春から、土橋 宏(東京)、辻 庸良(東京)、松本 悦明(静岡)氏らの強い呼びかけで、東京近辺在住者が集まり、数度の会合を重ねた結果、節目の年を無為に過ごしたくないという意向に引きずられる形で、懇親会の開催を決定しました。

開催場所は、東京、静岡と意見が割れましたが、年齢、境遇を考えれば地元在住者を除いて、静岡を訪れる最後の機会になるだろう、との主張が通り、静岡市での開催に決定し、開催日も秋たけなわの10月下旬が最適ということで、10月24日に決定しました。

大卒の決定を受け、有志各自が案内文の作成、その他の業務を分担、会場は便利さを重視して静岡駅前の「ホテル・アソシア静岡ターミナル」を選び、旧国鉄OBの曾根氏に宴会・宿泊の交渉を一任する。

9月21日の打合せの日までの出席予定者は23名、これを30名まで増員を目標に再度呼びかけを行うため分担を決め、併せて開催日の業務の分担を協議し、各自の了承を取り付ける。

10月24日、前週末までのぐずついた天候が嘘のような爽やかな秋晴れで、ホテルの窓からは、当日の集まりを祝福してくれるかのように、富士の美しい姿が覗いていました。

定刻11時30分、開会された懇親会は、全員集合の写真撮影を済ませた後、福住達夫君が司会を担当、最初に物故者14名への黙祷を捧げた。

続いて発起人を代表して吉川紀一が代表挨拶に立ち、開催までに至った経過説明をし、今日集まった同窓生など気の置けない友人と雑談することは、健康で長寿を保つ一番大切なことで、余命を楽しく充実して過ごすために、一人でも多くのよき友を持つことが良いと強調された。

続いて来賓として出席された鈴木基之同窓会長(文理14回卒)からは、卒業50年へ

の祝辞とあわせて、大学の同窓会が今年創立52年を迎える経過説明と、今後の同窓会活動発展への協力要請があり、さらに同窓会長就任の裏話の披露、そして代表挨拶にあった「壮年・老年」への反論として「青年・壮年」を強調する締めくくりの話をいただいた。

松本悦明君が乾杯の音頭をとった後、懇親会となり、出席者全員の近況報告を行う。全員の紹介は無理なので印象に残った2.3を紹介すると、山田透君が還暦から始めた「スーパーヒマラヤトレッキング」の話では、目標達成するためには110歳まで生きる必要があるということや、ガイドを務めるから、と同好の士を募ると、結構反応が多かったのに驚かされた。近藤正巳君の波乱万丈の半生の紹介、馬場泰男君からはブームになっている生茶ペットボトルの中身は色付き水にすぎないから、是非、緑茶をと商売上の推奨コメントがあった。

曾根隆行君が飛び入りで、声は良かったが言語不明瞭なラテン曲の披露の後、現在名古屋市を中心にプロのシャンソン歌手として活躍している清水碩治君が得意の喉をマジックまで交えて4曲熱唱し、最後に「見上げてごらん……」を歌唱指導しながら全員の合唱で締めくくった。良知(杉野)幸子君による「一期一会」に続く「も」と「を」についてのユーモアたっぷりの話は、閉会の挨拶としては秀逸でした。

さらに希望が出た仰秀寮代表寮歌「血のさざめごと」を声高らかに歌い上げた後、元気に再会することを約して「楽しかったひと時」を大切な思い出として散会した。

散会の後、有志11名は共通の時間を過ごすため静岡市北郊の油山温泉・油山苑に宿泊。入浴後、食事を共にしながら夜遅くまで歓談。翌朝、大岩校舎跡を散策した後、静岡駅で解散。なお、文理3回卒業生の動静は開催日当日で次のとおり。

昭和30年卒業時84名(文理合計)、物故者14名、出席者24名、欠席者30名、無回答16名。



生涯学習の中での歌(言語で熱唱) (河中二講先生を囲む会)

文理12法 愛野明宣

フランス語で、また日本語でシャンソンが、イタリア語でカンツォーネが、スペイン語でアルゼンチンタンゴが、それぞれピアノ伴奏で店内に朗々と、また感情豊かに響く。さら

に日本の謡曲が謡われる。

82歳の誕生日を5日後に迎えられる河中先生、そしてゼミ生にとっては忘れられないご夫人のお二人を主賓にして、70歳半ば(文

理2回卒)を筆頭に還暦目前のゼミ生(人文2回卒)まで、遠くは札幌、名古屋、静岡から、関東中心に15名が集まった。

「生涯学習」が言われて久しいが、まさに豊かな人生を象徴する発表やお話のオンパレード。話題になった言語を列記すると、フランス語、イタリア語、スペイン語に追加して、ロシア語、英語、ドイツ語、中国語(漢詩)。

先生の叙勲のお祝いから4年ぶり、第9回目となる「河中二講先生を囲む会」が、10月1日、東京四谷三丁目の「ウナ・カンツォーネ」で開催された。

グラスを傾けながら、まずは河中先生の歌、続いてプロのシャンソン歌手杉浦美恵さんの歌、そして出席者のお話や出し物、時間は12時30分から、まだまだ尽きない中で終了はなんと16時。

社会人としての忙しい人生の中で、それぞれに時間をかけた楽しみを持ち、なんと充実した生活を送られていることであろう。肉体的に健康でいられると同時に、心の健康にも心がけてこられたことが、参加者全員から強く窺われたことである。

次回の開催は、それぞれが年配者ということもあり、3年後と決まった。さらにその先、先生の米寿のお祝いへと続くよう、互いに健康を祈念しつつお開きとなった。(シャンソン等の題名)

ロレットの店、ユーカリ、ノス

タルヒアス、カルーツ、平原の故郷、パリの空の下、枯葉、ミラボー橋、チキリン・デ・パチン、カリブの恋の物語、オ・ソレ・ミラ、鶴亀

(参加者)

河中二講先生ご夫妻

文理2回 佐野 哲

文理3回 曾我良勝

文理6回 小嶋清美

文理7回 小玉重光、中島鎮夫

文理11回 田代和則

文理12回 愛野明宣

文理13回 伊藤英敏、望月圭二

文理14回 小形耕八

文理16回 鈴木検事、高橋建雄、八木 博

人文1回 向井俊夫

人文2回 高橋 保



感情一杯に熱唱中の河中先生

「静岡大学学生新聞」バックナンバーのCD-R完成 ご希望の方に頒布します

静岡大学学生新聞会「元気会」会長 上田克己(文理9回卒)

学生新聞会のOB&OGの集まり「元気会」は、1999年の開学50周年記念行事の一環として再発足しましたが、その会場で学生新聞のバックナンバーを整理・保存しようとの提案がありました。

2002年の「元気会」の開催時に、大学のサークル棟に保管されていた学生新聞を整理し、欠番となっている号は持ち合わせている会員より提供を求めてバックナンバーを整えました。

これらの学生新聞は、静岡大学の歴史や当時の日本の足跡を記した貴重な資料であることから、大学の図書館に寄贈するつもりでしたが、図書館は「独自に保管している学生新聞も傷みが激しいので、長く保存が可能な形であれば」との意向でありました。

そこで2004年の「元気会」で、永久的に保存が可能な電子化(CD-R化)をして、大学や図書館のほか関係各所に寄贈して後世に役立たせるために、その事業を行う静岡大学新縮刷版編纂委員会を立ち上げました。

編纂委員会は、2002年に整理したバックナンバーに大学の図書館に保管されていたものを加え、さらに文理・人文学部同窓会紙「岳」や会員に「欠番探し」を呼びかけ、680頁にわたる215号の定期号と24号の号外を確保しました。

その過程で、混乱した戦後の社会情勢の1949年に新設された静岡大学で、学生新聞は1952年(昭和27年)に創刊され、その後1978年(昭和53年)と1984年(昭和59年)に2度復刊しながら、1990年(平成2年)に休刊となる39年間に、「学問の自由

と平和と民主主義」を願った学生や大学の発言を249号の定期号と数多くの号外で伝え、大きな役割を果たしたことが判明しました。

2004年に「元気会」会員から製作費用の寄附を募るとともに、文理・人文学部同窓会からも助成を賜わり、2005年に電子化(CD-R化)を完成することができました。(写真参照)

このCD-Rは、関係各所に寄贈するとともに、同窓会員の皆さんや「元気会」会員などに頒布をいたします。ご希望の方は、以下の要領で頒布いたしますので、ご購入いただき当時は検証いただければ幸いです。

- 1) 頒布価格 2,000円(郵送料含む)
- 2) 頒布時期 2006年初頭より
- 3) 申込方法 郵便振替払込票にて、下記口座番号に振込をお願いします。
(振込票に、郵便番号・住所・氏名・電話の明記を願います)
口座記号番号 00180-7-629876
加入者名 静岡大学新縮刷版編纂委員会
(山下悦男名義)



熊野古道を行く(第5回)

文理9経 小林五郎

スタートの川尻王子跡は古道館の向かいにあり、五躰王子の一つとして栄えたが、塩見峠越えができてから衰微してしまっただけでなく、古文書によると、その昔、奥州の覇者藤原秀衡夫婦も熊野詣の途中この王子を訪れているが、夫人がここで出産している記事が残されている。臨月の身重で橋もなかった岩田川を渡って、よくもこんな山奥まで来たものだと昔人の遅しさに驚き入るばかりだ。先の国道を直進すると30数キロで本宮に着くが、私は2日ばかりで明日の本宮着を目指す。

滝尻王子社は大きな杉木立の中につつましく建っていた。これから中辺路に向かう若夫婦や、ドライブ途中に立ち寄ったらしい老夫婦など何人かいて、今まで訪れてきた王子社では最高の賑わいだ。滝尻王子社を一步出ると、たちまち鬱蒼とした杉林で、一面に苔むし、ゴロゴロした岩だらけの急峻な山道になる。途中で「乳岩」の名所がある。秀衡は産後間もない乳飲み児をこの滝尻の裏山の窟に残して熊野詣を済ませ帰ってくると、赤ん坊は狼に守られ、岩から滴り落ちる乳を飲んですくすくと育っていたという言い伝えによる。更に急坂をよじ登ると不寝王子跡があり、間もなく標高329米の飯盛山直下に到着する。ここからは見晴らしの良い尾根伝いの道が続いている。スケッチしたり、写真を撮ったりハイキング気分でもと歩きやすい道だ。紅葉には少し早い、もみじは色づきはじめ、スキの穂もあちらこちらで揺れてすでに秋の風情は十分感じられる。

この旅は今日で7日目になるが、何日間歩いても古道を旅している人とすれ違うことはなく、四国遍路ほど知名度がないからなのだろう。一昨日、印南港のほとりで大きなリュックを背負い、いかにも熊野古道を歩いている風情の中年男性とすれ違ったのが唯一である。これ以外は、稀に地元のハイカーに会うくらいで、静岡近在の、少し有名なスポットだと沢山のハイカーでうるさいくらいだが、ここ熊野はこんなに素晴らしい自然があるのに殆ど訪れる人がいないのだ。

左手の谷間には国道が並行して走っていて時々木々の切れ間から白く光る道路が見える。この山並みは悪四郎山の781米が最高で標高4,500米の高さの緩やかな尾根道になっている。杉や桧の林、水樺や榎など雑木林、すすき原があり、結構変化に富んでいて飽きないコースである。10時過ぎに高原熊野神社に着く。今日は祭り日、本殿前では宮司さんが境内に集まった氏子を前に榊でお祓いをしている最中だった。神殿は赤みの強い朱塗りに極彩色の模様が描かれていて、その前で左右に振る榊がとても美しかった。すぐ近くに休憩所があり一休みしていると、中高年のハイカーが5,6人やってきて休む間もなくあわただしく発って行った。休憩所の東側は大変見晴らしが良く、段々畑が谷間に向かって続いていて、その向うは幾重もの山並みが果てしなく続いている。古道に沿って民家もあるがそれもまばらで静かな山村である。神社からの古道は、しばらくは平らの石を敷き詰めた地道を上ってゆくが、やがて昔ながらの石畳の道になる。石畳の途切れたあたりに突然大きなため池が姿を現す。人造湖なのだろうか、水は濁っている。間もなく大門王子跡につく。桧林の中にかわいらしい祠がポツンと、朱塗りの柵に囲まれて建っていた。古道は十丈峠に向かって高原坂を上ってゆく。峰伝いの平坦な道だ。十丈峠にある十丈王子跡は背丈ほどもあるすすきや夏草で覆われていて、ようやくベンチを見つけて休憩し、朝食で用意していただいたおむすびを食べる。

秋虫やヒヨドリの鳴き声以外は風の音さえ聞こえてこない静かな世界だ。

ここからは緩やかな上り坂になり、落ち葉の堆積するふかふかの道が続く。歩き出してから数分のところに小判地藏がある。この地で力尽き小判を口にくわえて息絶えた人を祀ったものだ。小判はあっても山の中では買う店もなく飢えには克てなかった。現代にも通じる教訓的な実話である。ここから杉林になり、杉の枯葉がもこもここと地面に積み重なっている。12時半には上田和茶屋跡に着いた。一帯は平地で、今は薄暗い林になっているが、かつては民家も建っていて人どおりもあり、商売としても成り立つ時代が続いたのだろう。

ここから下り坂、おおよそ30分で大阪本王子跡に来る。谷川沿いの道で、杉林の中は背丈の低い灌木が繁っているが見通しはよくて意外に明るい。谷川の水を両手ですくい喝いた喉を潤す。可愛らしい牛馬童子像を過ぎるとすぐ箸折峠だ。この峠の下が今日の行程の終わる近露部落である。山道からアスファルトの車道に出て1キロも行かないところに北野橋があり、渡ると左側に近露王子跡がある。森は立派だが祠はなく、出口王仁三郎の筆になる「近露王子の跡」の大きな石碑が建つのみである。近露を最初に地図で見たときは山の中の民宿を想像していたが、百件以上の民家のある大きな集落で、旅館や民宿が5軒もある。熊野街道の要所で、先ほど越えた日置川の水で現世の不浄を祓う禊ぎの行なわれた重要な場であった。

王子跡のすぐ近くにある月の家旅館に泊まろうと思ったが不在で、少し離れた「たかだ旅館」を訪ねると泊まれることになった。まだ日も高く近くの中辺路美術館「に行くがあいにく休館日だった。橋近くでスケッチをし、農協売店でりんごと蜜柑を買って宿に帰る。客は私一人で、女将さんは2間続きになっている10畳間の仕切戸を開け、大広間にしてくれた。南向きの大きな窓からは太陽が溢れんばかりに差し込んできて、元来田舎者の私には、一仕事を終え、秋の日差しを全身に浴びてゆったり過ごすこんな時間が至福の時なのである。夕食には野菜中心の懐かしい田舎料理が食卓に並んだ。

8日目 10月15日

5時起床、昨夜は、9時過ぎまで子連狼などを見ていたが急に眠くなりそのまま朝まで一眠りだった。6時半に朝食をすませ、いつもどおり7時に宿を出た。近くの四辻を右に曲がると上り坂になる。小原峠近くで日の出になった。朝もやのかかる杉木立の間から朝の光が放射線状に拡散し、四国の雲辺寺近くで遭遇した同じ光景になった。杉林を抜けると、山の中腹にある近野部落に入ってきた。部落といってもポツリポツリと家がある程度だが村中を通る道が素晴らしい。車1台が通れるくらいの道幅だが、路面には細かい五色の玉砂利が敷き詰められていて、弾力がありとても歩き心地がよい。見晴らしも良く、左手は山を背負っているが右手は傾斜地で、畑や木々の向うには幾重もの山並みが連なっている。比叡原王子跡を経て継桜王子跡に着く。王子横には現在も営業している「とがのき茶屋」があるが、早朝で閉まっている。茶屋の隣には、秀衡の老樹が枝を道路の上まで広げている。この樹は藤原秀衡が滝尻に残してきたわが子の無事を祈って、ちかくにあった桜を手折り別の木に挿したのが接桜になったという伝承がある。中ノ河王子を過ぎると二車線のアスファルト道に出た。道は右にカーブしその左手にはトンネルの出口が口をあけ

ていて、そこからは冷蔵庫を開けたときのような、ひんやりとする冷気が勢い良く噴出してきていた。トンネルは2000米ありその中で冷やされてくるのだろう。真夏になったら逆に暖かく感じるのかもしれない。小広峠にある小広王子跡からは再び山道の古道に入り、少し下がるとすぐ上り坂になり、熊瀬川王子、わらじ峠を経て栢川に向かって急坂を一気に下る。かつての古い石畳は崩れてゴツゴツの岩道になり、杉の根が張り出して往時の面影はないが、なぜかこの下り道は「女坂」と呼ばれている。いったん平地に出て、再び杉林の急な上り坂を駆け上がる。ほんの5分ほどだが、こちらの上り坂は「男坂」の名がついている。しばらく尾根伝いの道が続くが、岩神峠にある岩神王子跡を過ぎた辺りからおおよそ2キロにわたって、杉林や雑木林を縫って走る“これぞ熊野古道”と叫びたくなるような、素晴らしい古道が続いている。

やがて、おぎん地藏を経て蛇形地藏に着く。蛇形地藏は古道から百米ほど入ったところにあり、近くには沢山の幟旗が薄暗い杉林の中に立っている。木々が途切れ、ぽっかりと空いた明るい空間の中に、地藏を祀る小さい祠が建っていた。久しぶりにカメラを手にした旅人に出会った。湯川王子跡からは標高差1600米の急な上り坂になる。25分かかって上りきり三越峠に着く。ここで中辺路町に別れ本宮町に入る。本宮までいよいよ13キロ余を残すだけになった。この辺りからは奥熊野といい、熊野本宮の懐に足を踏み入れたことになるが、平安人の感慨はいかばかりであったろう。峠からは下り道で、下の方からせせらぎの音がかすかに聞こえてきて、やがて小さい谷川が姿を現す。例によって両手ですくって口に入れる。谷川の水ほど美味しいものはない。この谷川は音無川の上流で、下るほどに水量が増し、大きな流れになってゆくの手に取るようにわかる。大変歩きやすい道で、川の流れる楽しみ、道の両側の草木や、野菊、名も知らぬ紫色の小さい花を見つめながら歩いていると、昼近くになり間もなく船玉神社に着いた。天神さんと神社が並んで建っている。神社は半ば朽ちかけていて、拜壇近くまで杉の枯れ葉で埋もれていて、村人が参拝している形跡は全くない。天神さん前の石段にビニールを敷き宿で用意していただいたおむすびで昼食をとる。昨日JAで買い求めたりんごと蜜柑も食後のデザートで食べるが、山の中で汗かいた後で食べる果物の味は格別である。

河に沿って広い林道をしばらく進むと、再び山道の古道に入る。岩や杉の根の張り出した急坂を下ると発心門王子に突き当たる。かつては「発心門」の大鳥居が立ちこれが王子名の由来になっている。発心門とは、熊野の中でも聖域への門であり、ここからが熊野本宮大社の入り口であった。かつては樹木が覆う鬱蒼と繁った山中の道で、熊野に詣でた藤原定家は「深山樹木多し、莓苔あり、木の枝にかかりて藤が枝のごとし」と記している。今も杉林におおわれ、王子跡横には立派な休憩所が建っている。ここからは車が通れる広い林道を下るが、左手には下枝を切った杉の大木が整然と立ち並んでいる。その一角に「ほんまものロケ地」の看板が出ている。半年ほど前にNHKの朝の連続ドラマで放映された舞台で、熊野の山の中だったことを思い出しても懐かしい気持ちになった。歩くほどに視界が開け民家が現れ山里に出てきた。昔、弘法大師が杖で地面を突くと水が湧き出したという伝えがある水呑王子跡は、家と畑に囲



まれた四辻の日当たりの良い場所に立っていた。数分歩いた所には「ほんまもの主人公の実家」があり、観光スポットになっているが人影はない。近くの専用駐車用もがら空きで、おそらく放送直後は各地から沢山の観光客が詰めかけたろうに、最近熱の冷めるのが早いようだ。変化に富んだ風景やほんまもの物語を思い浮かべながら、しばらく歩くと大きな交差点にさしかかる。山仕事をしている村人がいたので、熊野本宮までの所要時間を聞くと、「そうだね、3時間はみておいたほうがいいね」という。地元の人のいうことに間違いはないので、時計を見ると1時少し前で、4時前には到着できそう。近くに伏拝王子跡がある。この地こそは熊野詣の旅の最終地点に近く、苦難の果てにたどり着き、はるか彼方に大斎原を見やり感涙したところである。眼下はるか下方に、熊野川が光る川州の只中に見えるこんもりした森こそは夢にまで見た本宮大社大斎原なのである。昔人はここから大斎原を伏し拝んだ。平安中期の女流歌人、泉式部もここを訪れた一人であり、藤原定家も喘息に苦しみながら旅を続け、この地から伏し拝んだ感激を「感涙禁じがたし」と書き残している。実際同じコースを旅してみても、昔人の気持ちを実感として湧き出てくる。20分ぐらい進んだところに小さいつり橋が架かっていて、若い夫婦がハイキングで訪れていて記念写真を撮っていた。ここから本宮大社までは歩きやすいなだらかな古道が続く。やがて本宮大社のすぐ裏手にある祓戸王子跡に着く。滝尻王子から500米毎に立てられていて、目印になり、かつ励みにもなっていた「熊野古道」の道標もナンバーが75で終わり、2日ばかりで越えてきた中辺路の古道もここでようやく終わりを告げた。こうして新宮大社には2時に着いた。伏拝み近くの村人には3時間といわれたが1時間で着いたことになる。地図で距離を調べると5キロ位だから別段私が早いわけではないが、大社が近づくとつれて、2日間歩いてきた中辺路の道がいとおしくなり、多分最後になるだろう坂道を一步一步かみしめながら歩いたり、上り坂は名残を惜しみながらゆっくりゆっくり歩いたりもした。普通ハイキングではけっして味わえない感情である。本宮大社には2、3年前、川湯温泉にきたときに立ち寄っているが、その時は名前も意味も判らず山の中にある大きな神社にすぎなかった。今回は多少研究もし、8日かけて250キロ近く歩いてたどり着いた大社は、全く別の顔と表情をして私を迎えてくれた。同じ対象物でも、心のありようによって様々に変化し、全く別

物になってしまうのである。そこにいたる過程の差がこの違いを生み出すのだろう。私が歩き旅にこだわるわけはこの辺にもあるようだ。大社には20分ほど留まり、湯の峰温泉に向けて歩き出す。入り口が判らないので近くの店員に聞くと地図をくれ親切に教えてくれた。途中、川原の中の大社跡地大斎原を訪ねてみる。礎石が完全に残っている外は何もなく、周囲は杉の巨木が繁っている。明治22年の大洪水で大被害を被り、川州の大斎原から現在の地に移されたのである。

店員から教えられたエッソのスタンドは間もなく見つかり、右側に熊野古道入り口の小さい看板が立っている。狭い石段をすり抜けるように上がると、民家の庭先を通過して山に向かっていく。たちまち階段状の険しい山道が私の前に立ちはだかった。下ってきた中年男に道の状況を聞くと「きついですよ!」時間はかかります」したたりおちる汗を拭おうともせずと答えた。終日歩いてきた体にはきつく、たちまち全身から汗が噴き出し、額を伝わり目に入ってくる。ガイド本には「大日越え2キロ」とだけあり気軽に考えていたので、まさかこんなに険しい山坂が待ち受けているとは予想もしなかった。途中、30人ぐらいの中年男女が歩いていて、ゆっくりしているので追い越して先に進む。およそ30分で頂上に着く。岩や木の根が露出した平坦な尾根道を数分歩くと、のぼりと同じ急な坂道を木々の間をぬって転げ落ちるように下る。15分で谷間にあるひなびた温泉街、湯ノ峰温泉に出た。出口に湯ノ峰王子跡があり、隣には小栗判官ゆかりの「つぼ湯」と「湯ノ胸薬師」がある。湯ノ峰は、湧き出ている温泉の硫黄が固まり薬師像の如き形状になり、その胸の辺りから湯が湧きでていたことから「湯の胸」がなまり「湯の峰」なまったという。90度近い熱泉が河原から噴出し、もうもうと湯煙がたちこめている。この温泉は成務天皇の頃発見された日本最古の温泉といわれ、熊野詣の湯垢離としても知られている。また歌舞伎で有名な小栗判官正清と照手姫の物語の最後の舞台としても有名である。身分の違いで結ばれず殺害された正清は地獄に落ちるが、閻魔大王の情けで癩者に身をやつして娑婆に戻る。土車に乗せられて、各地を放浪していた時、遊女になった照手姫の常陸小萩とめぐり合い、常陸小萩に引かれてこの地湯ノ峰にたどり着き、壺湯につかって元通りの体になり目出度く二人は結ばれるという物語だ。

川を挟んで両側に旅館が並んでいる。「露天風呂よしのや」の看板が目にとまり訪ねてみる。庭先には車が2台止まっていて、1台からは、今着いたばかりの外人の老夫婦が荷物を車から降ろしている。民家風の家で、玄関には大人子供の靴が乱雑に脱ぎ捨てられていて、旅館にしてはひどい玄関だ。民宿なのだろうか。「ごめんください!」と、大声で何回呼んでも返事がないので諦めて通りに出てもう一度看板を見直すと、「よしのや」の看板の横に立派な建物が建っているではないか、民家の庭先を借りて駐車場にしてあったらしくとんだ早とちりだった。本物の「よしのや」の玄関に入ると、先刻車からバックを降ろしていた外人さんもチェックインしていて、「こ

の旅館は食事が美味しいのでいつもここで泊まるんです」と流暢な日本語でしゃべる。日本にいる外国の研究者らしい風格で上品な老夫婦だった。二食付き7,500円、部屋は通りに面した6畳間で窓を開けると温泉街が一望できる。良い旅館にめぐりあえてとても幸せな気分だ。早速露天風呂に入ることにする。風呂は玄関を出て道を隔てた向かいにあった。岩風呂の周りにはもみじの木があり、落ち葉が2,3枚湯面に浮いていて得も言えず風情がある。元湯の温度は90度近くあり、そのままではとても熱くては入れないが、谷川の水を引いて竹のトイを通し、高みから滝のように勢いよく流れ落ちていて丁度良い湯加減になっている。硫黄泉で懐かしいにおいがする。少しぬるっとするからアリカリ分が強いのだろうか、とても気持ちの良い温泉だ。これが日本最古の温泉なのか、小栗判官を治した湯だから体に効くのだろうか。気のせいか疲れがとれたようだ。湯から上がる頃には雲行きが怪しくなり、たちまち大粒の雨がパツパツと音を立てて落ちてきた。そのとき、旅館横の道をあわてて通り過ぎる一団があり、急いで雨具を出して身につける人、頭に手をして走り出す人などであわただしい。この人たちは途中で追い越したグループで随分のんびりしていたものだ。山もそうだが旅は早めに行動するのが鉄則でこんな目にはあいたくない。

夕食は外人夫婦推薦のとおり大変美味しかった。近ければ毎年泊りに来たいようだ。今日で中辺路の旅は終わった。期待していた通りの素晴らしい中辺路の古道であった。ありがと!最後の日越えは予想外の大汗をかいたがこれも思い出の一つになるだろう。2日間を通して殆どの道は杉や桧の中を通り、雑木の落ち葉が積もる道であった。多少汗はかいたが暑さに体力を消耗することもなく、楽しくとても歩きやすい道だった。林の中の素晴らしい古道を心行くまで堪能でき、本当に幸せ気分一杯だ。この旅も、いよいよ明日の雲取越えで終わるが、ここからが少し難関で、もう一汗かきそうだ。熊野古道の旅は、四国遍路と違いお大師さんはいないし、供養するという十字架も背負っていないので、同じコスモスの花を見ても涙のでもなく、素直に美しいと感動できる。ここが大きな違いである。たとえば道を聞いた時、土地の人は四国と同じように親切に教えてくれる。梅林で迷ったときもあの老夫婦は、途中までトラックに乗せてくれたし、方々でたくさんの人々のお世話になった。四国には、いたる所にお大師さんがいて人の情けに涙することが多いのに、この地では日常生活の延長で、「すみません」「ありがとう」ですんでしまうのだ。結局のところお大師さんは心の中に存在するのだが、四国に一歩足を踏み入れるとスーッと心の中に忍び込んでくるみたい。

夜7時過ぎ、川音に混じり雨音が一段と激しくなった。夕立ならよいが明日の天気心配になる。あまつさえ2度にわたり停電があり古い温泉街は暗闇になった。

先日、中部地方のさる国立大学の先生が院長室を訪問する機会がありましたが、本学の法廷教室をご覧になってたいへん驚いていらっしゃいました。本校より早く16年度にスタートした法科大学院でも、いまだ法廷教室を整備できないところもある一方で、学生たちの自習室環境もさることながら、法廷教室まで完備して教育研究を開始できた幸せをあらためて嘖みしめているところです。裁判員制度の導入など司法制度改革が進行しておりますが、報道機関でも法廷の映像が必要になり、かといって実際の裁判所は設備を開放していないため、本学の模擬法廷が地元テレビ局間でも重宝されているという事情もあります。

近いうちに、本校のしかるべき壁面に、法科大学院の施設・設備が静岡大学法科大学院支援協会をはじめ同窓会などの大きなご支援をえて整備された経緯を記念する銘板を取りつけたいと考えております。その節には、同窓会の代表にもご出席をいただいて、序幕式を執り行いたいと考えておりますので、よろしくお願い致します。なお、支援協会を通じてご寄付を頂いた方々には、近々、「静大法科大学院ニューズ・レター」をお届けする準備をすすめておりますので、ぜひご覧頂きたいと存じます。

静大法科大学院では、この夏、「地域における国際化と法曹の任務」をテーマとして、新潟大学および北海学園大学(札幌)の各法科大学院と共同で申請しておりました文部科学省の「法

科大学院形成支援プログラム」補助金を獲得することができました(平成17ないし18年の2カ年間で計4000万円)。本校のモットーでもある「地域と連携し、地域に貢献する」ために大いに役立てたいと考えております。

また本校では現在平成18年度入学試験を行っているところですが、この10月28日に締め切った受け付けでは、入学定員30名のところ合計229名、7.63倍の入学願書を得ることができました(昨年は97名、3.23倍)。「法科大学院元年」(平成16年)にはブームの感さえあった入学志望者も現在では全国的にかなりの落ち着きを見せるようになり、入学の最終手続者が定員を割り込むような法科大学院もちらほら始めている状況のなかで、昨年をも大きく上回る志願者を得たことに、私ども法科大学院の教育研究スタッフ一同としても安堵するとともに、新たな年度への意欲を固めているところです。

同窓会の皆さまには、引き続き静大法科大学院を見守り、ご支援を賜りますようよろしくお願い致します。



模擬法廷

静岡大学法科大学院支援協会より ご寄附の状況報告とご寄附のお願い

法科大学院支援協会事務局長 山脇貞司

静岡大学法科大学院の教育支援及び大学院学生の奨学制度創設を中心に、平成16年12月から寄附活動をスタートさせ、平成22年3月まで5年間で7000万円を集めることを目標に取り組みしております。同窓会誌「岳42号・43号」の同窓会会員への配布の際に「寄附のしおり」も同封させていただきます。多くの皆様方のご厚志をいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。平成17年9月末(第2次締切)現在で、静岡大学がお受けした寄附件数は337件、寄附額は1996万円となっており、文理・人文学部同窓会からも530万円のご寄附をいただくことができました。このように、同窓会の皆様方が、組織として、はたまた個人として静岡大学法科大学院の発展のためにご尽力いただいていることに対して、法科大学院の教職員・学生は

きつと応えてくれることと思います。現在のところ、寄附金は法廷教室等の施設設置、奨学金制度の創設、法曹実務家教員のレベルアップ研修経費等に使用しているとのことです。目下、平成18年3月末(第3次締切)までに3000万円の寄附を集めることを目標に活動を進めておりますので、いまだご寄附をいただいておりますので、いまだご寄附をいただいております方にも引き続きご支援いただきますよう心からお願い申し上げます。

なお、本支援協会は、静岡県商工会議所連合会会長の松浦康男を理事長とし、県下の各界の方々によって構成されている静岡大学法科大学院支援団体であることを申し添えさせていただきます。



大学

静大法科大学院の近況

静大法科大学院長 大江泰一郎

法科大学院が平成17年4月に出発してはや半年余が過ぎました。おかげさまで、今日ま

でのところ順調に教育研究の仕事が進行しております。あらためて厚く御礼申し上げます。

「アップレ講座」のこれまで、これから。

言語文化学科 日本アジア言語文化コース 助教授 小二田誠二

おかげさまで、前期の「静岡の文化」は無事終了。現在後期の「情報意匠論」が進行中です。「静岡の文化」では、七月に発表された成果の内から、十二月に、文化財や環境に配慮した見学のあり方を考えながら丸子泉ヶ谷を散策する、という企画があります。また、「情報意匠論」関係では、昨年度の成果から、「天晴れ門前塾」という、社会人と学生を結ぶ新しいゼミの企画が生まれました。こちらは、静岡ではかなり報道されましたので、ご存じの方もいらっしゃると思います。今後も、地域と大学が手を携えながら、楽しく学べる場所が、どんどん広がっていくものと期待しています。

さて、気が早いようですが、既に来年度の予定を組む時期になりました。様々な御意見

を戴きつつ、二本の授業とも、今年度と同じ時間帯に開講する予定になっています。特に、「静岡の文化」は、社会人と学生が、ともに学びやすい時間帯、と言う問題と、学務の制度的な問題のかねあいの中で、非情に難しい選択を迫られましたが、もう一年は月曜の夜で、ということになりました。お近くの方は、是非ご参加下さい。

「アップレ会」は、多くの市民の方々のご支援によって成り立っています。同窓会の皆様も、是非ともご支援を賜りますよう、この場をお借りして、お願い申し上げます。詳細は、ホームページを御覧下さい。

<http://appareshizuoka.web.infoseek.co.jp/>

人文学部における地域社会との連繋の一層の強化を目指して —地域社会文化研究ネットワークセンターの役割—

センター長 経済学科教授 山本義彦

地域社会文化研究ネットワークセンターは、2001年に人文学部に設置した、文科系の大学と地域を結ぶ連繋窓口です。従来、どの大学でも文科系の分野が、多様な地域との連携活動を行いながらも、大学社会はもとより外部からも見えにくい問題点を抱えてきました。

その理由としては、第一に外部資金を大きく取り入れる様な華々しさがあるわけでもなければ、目に見える技術的成果を社会にアピールするようなこともなかったからでしょう。そして何よりも第二に、教員の個人的活動によって支えられてきたために外部から一層見えにくい状況があったものと思われま

す。ところが数年前から、大学評価・学位授与機構による大学の地域連携活動に関する調査、点検活動が行われる状況もある中で、私などは、全学の地域連携事業の点検報告書作成の立場から、同機構と接触する機会を通じて、何らかの地域連携窓口を文科系でも設置することによって、大学の地域社会における役割に力を入れるべきことを痛感していました。

2001年に人文学部教授会として、設置を決めて発足したのが、この地域社会文化研究ネットワークセンターです。幸い、この面でも高い実績と経験を有する土居英二経済学科教授が初代センター長として4年間、この任に当たり、様々の取り組みを行ってまいりました。2005年度からは未熟ではありますが、これを引き継ぎ、私がセンター長を務めてい

考古学コースの大学生活

社会学科考古学コース2年 飯田祐輔

私は、人文学部社会学科の考古学コースに所属している2年生である。その学生生活は、所属コースのとおり考古学が中心である。私は、様々な考古学関係の科目を履修して、その形式は、先生の話を聞き知識を得ることのできる講義形式のもの、本や論文を読み自分なりに考えをまとめ考え方を習得できる傾向の強いゼミ形式のものなどがあるが、最も特徴的で、魅力的なのは実習形式のものであるだろう。

実習形式の科目は現在、考古学基礎演習Ⅰ(通年)を履修中である。ここでは、石器の実測(寸法を測りそれを図にすること)から始まり、須恵器の実測、埴輪の実測、墨で土器や鏡の紋様を写し取る拓本、実測図を製図する

トレースなど考古学に関わる技術を教わることができる。

教わる技術ごとに提出するべき課題があり、それぞれが大変苦労するものである。そのために毎回のように実習の授業時間が終わっても、そのまま居残って自分の納得するまで課題を続ける人や、何回も空き時間に考古学研究室に赴き、課題を少しでも良い物にしようという人がいるように個々のモチベーションは極めて高く、お互いに技量を高めようという意識があり、実習中は個人の物に集中して取り組みながらも、他の人にアドバイスをするなど、とても良い雰囲気である。

また、長期休業中は履修単位とは別に現場に出て発掘や、測量を行っている。今年は静

岡市丸子にある古墳の測量を行った。現地は山の斜面のみかん畑であり、蜂や蚊などの虫に悩まされ、視界を遮るみかんの木の枝をよけながらの作業で、かなりの疲労は感じたが作業が進み等高線が繋がっていくにつれてなんとはいえない達成感と喜びを感じたことは印象的であった。

それらの成果をまとめたものを静大祭では考古展において発表している。これは、3年が中心となって先生方の御力を借り学生が準備を行っている。我々2年生は今年測量した古墳とその周辺の地形のジオラマを製作した。

考古学は発掘や、測量など共同作業の上に個人の研究があるので、チームワークを尊重しており、研究室の学生たちは仲が良く、また、

就職活動体験記

法学科4年 大野 薫

今振り返ってみると、就職活動というものは本当に学生にとって有意義で貴重なものなのだと思います。会社説明会では、企業は直接の自分たちの利益になるわけでもないのに、学生に時間を割いて多くの情報を提供してくれます。自身の会社のことだけでなく、業態の動向や社会のマナーまで教えてくれたりするので。就活すること自体が社会勉強の一環だなあと実感しました。

結果的に私は内定をいただくことができませんでしたが、就職活動を始めるぎりぎりまで本当に何から手をつけていいかさっぱりわからず、周りから出遅れちゃったなーと思っていました。「エントリーって何?」なんて本気で言っていました。そもそも、自分が何の会社に就職したいのかすらわからなかったのです。とりえず、自分が興味のあることをいくつかピックアップして、それに近い要素がある会社を探しました。2月に入る頃には、背中を押されるようにどんどん面接が始まりました。新しいことを始めると世界が一気に広がるもので、毎日就活のことで頭がいっぱいになりました。リクルートスーツを着ている自分がなんだか恥づかしいと思ったりもしましたが、面接のために遠出したり初めての人と会うことは新鮮で楽しかったです。

試験では、私はとにかく無駄に緊張するの

はやめることにしました。就職試験は大学受験とはまったく違い、いわば恋愛のように、決め手になるのはその会社との相性だと途中から感じるようになりました。とりえず笑顔の練習はして、アピールしたいことを頭に叩き込んで、自分はものすごくいい子である、と思い込んでテンションを上げていくようにしました。それで、結果落ちたときも「ああ、この会社とは御縁がなかったんだな、でもいい人材を逃して惜しいことしたなー」と無理やりにも自分の中でさっぱりさせました。あと、自分の見据える目標を「面接に合格」ではなくて「就職後やりたいこと」に置くことが大切だなと思いました。

私の大学生活はこれらの考古学に関することが中心になっている、そのほかにも教職や、学芸員などの資格に関する科目や、自分の興味のある科目をとるなど結構忙しいものであるが、考古学に興味を持ち、好きでこのコースに進んできたことは後悔していないし、この生活はとても楽しいものである。

はやめることにしました。就職試験は大学受験とはまったく違い、いわば恋愛のように、決め手になるのはその会社との相性だと途中から感じるようになりました。とりえず笑顔の練習はして、アピールしたいことを頭に叩き込んで、自分はものすごくいい子である、と思い込んでテンションを上げていくようにしました。それで、結果落ちたときも「ああ、この会社とは御縁がなかったんだな、でもいい人材を逃して惜しいことしたなー」と無理やりにも自分の中でさっぱりさせました。あと、自分の見据える目標を「面接に合格」ではなくて「就職後やりたいこと」に置くことが大切だなと思いました。

なんとなくここまで来てしまったけれど、来年から社会人になるのは実は不安でいっぱいです。新しいことを一から勉強しなおしであるし、自分のことを良く思わない人だってうまく付き合っていかなければならないし、私も大きな挫折感を味わうことになると思います。でも、すべて自分で決めて行動したことなので、その中で新しい魅力や小さな幸せが見つかって、充実した生活がおくれるといいなと思っています。自分らしさはなくさず、一所懸命がんばります。

学生生活について

経済学科4年 山梨 駿

早いもので、私が静岡大学に入って3年半が過ぎ、あと少しで卒業をむかえることになりました。あっという間にここまでできてしまったような気がします。この大学生活で、私は、多くのことを学びました。授業では、多くの知識を得たのはもちろんのこと、また、学校の授業以外でも多くのことを学べたと思います。

経験は将来にとって貴重な財産になると思っています。大学生には、たくさんの自由な時間があります。その時間で様々な経験をするのできるのです。私も、多くの経験をすることができました。まず、サークルに入りました。先輩、後輩など様々な人に出会い、多くの考え方を学びました。また、1年間代表を務め、組織をまとめあげ、動かしていくことの大変さも知りました。同時に、仲間と、活動することの楽しさや喜びを共有できたと思います。

次に、家庭教師、サッカー場でのスタッフ、コンサートスタッフなど様々なアルバイトをしました。どれも楽なものではなく、これらを通して、働いてお金を稼ぐことの大切さ、

大変さを学びました。現在、私は、介護ヘルパーとして、在宅介護をサポートするアルバイトをしています。多くの障害者や高齢者、それを支える人々と知り合い、その人たちの思いを聞き、知ることができるのは大きな発見です。今まで知らなかった医療・介護の現場を体験することは、私の幅を広げています。

このように、私は様々な経験をし、多くのことを学びました。それは、学校の授業とはまた違うものです。サークルであれ、アルバイトであれ、行動し経験することで、今までの自分の知らなかった世界に触れることができて、自らの成長につながりました。友達と徹夜で遊ぶのも経験です。一人きりで、孤独を感じるのも経験です。それらは、将来の自分に必ず生きてきます。大学では、多くの自由な時間があります。その中で様々な経験をすることが、授業の勉強とは別の、もうひとつの大事な勉強だと思っています。残り少ない大学生活ですが、多くのことを経験し、成長できればいいと思います。

書籍紹介

浜渦辰二編『〈ケアの人間学〉入門』 (知泉書館,2005年10月刊)

「ケア」という言葉は、「高齢者ケア」「障害者ケア」から「スキンケア」「ペットケア」に至るまで世の中に溢れています。「ケア」とは、広くは人やものに対する関心、気遣いであり、世話をすることを意味しますが、ここでは人間、言い換えれば他人への気遣いとしてのケアが扱われています。

ケアを考えるうえで、他者としての人間をどう捉えるのか。それは避けて通ることができないことがらです。個別具体的なケアの実践や理論も、人間への理解が曖昧ならば的確な対応や効果的な展開はできません。また実際に経験をすることによって、より深い行き届いた

人間理解への道も開かれていきます。わたしたちは誕生から死に至る生涯のなかで、「ケアされる人間」としてのさまざまな体験をしますが、本書は〈ケアする存在としての人間〉に視点をすえて、その現実を総合的に捉えようとする試みです。哲学、倫理学、宗教学から看護学、文学、芸術学、法学など多分野の専門家が、人間の心と身体、さらには社会的関係やスピリチュアルな側面にまで、多角的・学際的に光を当てた他に類のない待望のケア学入門です。

ポーリン・ボス著/南山浩二訳 『「さよなら」のない別れ 別れのない 「さよなら」—あいまいな喪失—』 学文社 2005年4月20日刊行 2,100円(税込価格)

本書は、Pauline Boss, Ambiguous Loss- Learning to live with unresolved grief- Harvard University Press(1999)の全訳である。「あいまいな喪失」とは、家族など親密な関係にある人が失われてしまったのかが不明確な喪失である。ニューヨーク世界貿易センタービルテロ事件の被害者家族への支援の基盤をなしたのも本書において展開されている「あいまいな喪失」理論である。「あいまいな喪失」には二つのタイプがある。第一のタイプは、身体的には存在していないが心理的に存在し続けていることにより経験される喪失であり、具体例としては行方不明兵士や誘拐された子供、突然の災害で行方がわからない人、人質・拘禁、成人して家を出た子ども、離婚による喪失などがある。第二のタイプは、身体的には存在しているが心理的に存在していない喪失であり、認知症、慢

性精神病、脳挫傷、脳梗塞、アディクションなどがあてはまる。「あいまいな喪失」は、残された家族に持続的かつ深刻なストレス状況をもたらすゆえに、悲嘆の過程もきわめて複雑である。書名を奇異に思われた方もいるかもしれない。しかし、二つのタイプの喪失とは何かをよく示しているのである。本書は、「あいまいな喪失」に苦しむ人々と彼ら/彼女たちを支援する専門家、研究者にむけられたものであり、著者の長年の研究者かつセラピストとしての経験をもとに、「あいまいな喪失」とともに生きる方途を模索しようとするものである。学術書ながら、語り口もやさしく多くの事例をまじえた議論となっており、日本図書館協会の選定図書に指定されている。(人文学部社会学科 南山浩二)

〈事務局への連絡〉

月曜日から金曜日の10:00～16:00にご連絡下さい。(休日、時間外はメール及びFAXにてご連絡下されば、後で対応いたします)

担当:土屋

終身会費納入のお願い

副会長 落合康彦

- ・納入用の郵便振替用紙が同封してあります。
- ・納入済みの会員には、岳送付用の封筒に貼られた宛名シールの会員コード(明朝体、斜体)の最後にPマークが入っています。**Pマークが入っていない会員が未納ということです。**ご確認下さい。例:1234S58P

個人情報保護

会員の大切な個人情報は、当同窓会の活動以外には一切使用致しません。第三者に開示・漏洩することは一切ありませんのでご安心下さい。

尚、会員データベースからご自分の個人情報データの削除をご希望される方は、下記の『変更データ個人票』またはホームページ『www.gaku.org』から事務局までお申し出下さい。

「2004年版会員名簿」 好評発売中!

今回は5年ぶりの改訂で、新たに人文32回(平成12年卒)から人文35回(平成15年卒)の2,252名、さらに工学部進学課程(工進)の昭和30年入学から昭和33年入学までの181名のデータを追加掲載しております。現・元教官等を含め、全体で14,502名となりました。会員必須!

価格:¥3,000(終身会費納入済会員)
¥5,000(終身会費未納会員)

同封の郵便振替用紙にてお申し込み下さい。(終身会費未納の方は是非この機会に併せてお納め下さい。)

『岳』が届きません!

発行の度に「転居先不明」、「転送期間終了」等の理由で、大量に送り返されてきます。

郵送費等がムダになってしまいます。

転居をされた場合には、ご面倒でも「新しい住所」「正しい住所」を事務局まで至急お知らせ下さい。会員の皆様のご理解とご協力をお願い致します。

会員の皆様へお願い

次の場合には必ず、「変更データ個人票」を同窓会事務局までお送りください。

- ・転勤、引越等により、住所が変更になったとき。
- ・自宅の電話番号が変わったとき。
- ・結婚等により、姓が変わったとき。
- ・勤務する会社等が変わったとき。
- ・その他会員名簿の記載事項に変更が生じたとき。

住所等の変更は、速やかにこの用紙に記入の上事務局へお送りください。

静岡大学文理・人文学部同窓会		全部で _____ 件		* データ作成者名	
変更データ個人票		No. _____		電 話 () -	
変更データ入手日		本部受取日		データ更新日	
年 月 日		年 月 日		年 月 日	
個人コード番号			連絡事項		
*文理・人文学部		回 昭和・平成		年卒業 専攻	
ふりがな		ふりがな			
*氏 名		新 氏 名			
* 名簿の 氏名 住所 電話 勤め先 支部 の変更(該当するところへ○を付ける)					
新 住 所		〒		新 勤 め 先	
新 電 話		() -		電 話 () -	

*は必ず記入のこと。
訂正検索の利便のため、卒業回、卒業年、専攻学科を必ず記入してください。

静岡大学文理・人文学部同窓会事務局

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学共通教育A棟
TEL・FAX 054-238-5148